

産業建設委員会所管事務調査（先進地事例調査）の実施内容

所管事務調査を実施したので、次のとおり報告する。

記

1 調査期間

平成 30 年 4 月 23 日（月）

2 調査先

青森県八戸市、岩手県滝沢市

3 調査委員等

泉川博明委員長、桑田鉄男委員、山口健一委員、濱欠明宏委員、
高屋敷英則委員、馬場徳之担当書記、大石美奈書記、長内紳悟書記

4 調査事項

(1) 青森県八戸市

- ・ 八戸ポータルミュージアム「はっち」の運営について

(2) 岩手県滝沢市

- ・ ビッググループ滝沢の運営について

5 調査結果

青森県八戸市

○八戸ポータルミュージアム「はっち」の運営について

1	日 時	平成 30 年 4 月 23 日（月）10 時～12 時
2	場 所	八戸ポータルミュージアムはっち
3	議 会	事務局庶務課 小笠原直美主事
4	説明者	八戸ポータルミュージアム 安原清友館長
5	概 要	

(1) 施設の機能

- ・ 中心市街地の衰退・空洞化対策として造られた複合施設であり、憩いの場、ふらりと立ち寄る場、芸術文化の鑑賞の場、子育て世代の交流の場となっている。

(2) 施設における自主事業

- ・ 貸館の他に中心市街地の賑わいの創出、文化芸術活動の振興、ものづくりを通じた新しい価値の創造、地元の魅力発信・観光を通じた地域活性化を目指した自主事業を行っている。

(3) 施設運営（直営）

- ・ まちづくり文化スポーツ観光部が所管し、平成 22 年に「はっち」オープンを意識して部が編成された。（元々は企画部だったが実践ができなかったため。）
- ・ 定休日は毎月第 2 火曜日と大みそか・元旦のみとしている。ただし、維持管理のためのスケジュールが定休日に集中することが課題である。
- ・ 館内の案内は「はっち」で募集したボランティアガイドが行っている。費用弁償として 1 回につき 1,000 円を支払う程度である。現在 30 数名登録しており、交代でガイドしている。

(4) コンセプト

- ・ コンセプト（事業・展示・建築）については行政側で土台を考え、市民とワークショップで作っている。首都圏のアーティストをアドバイザーとして位置づけ、意見を反映させている。

(5) 施設内外の連携

- ・ 庁内各課とは連携が図れている。ブックセンターとの日常的な連携・回遊性については整備を要する。イベントは年 1 回行う程度である。

(6) こどもはっち

- ・ 日常利用で施設内最大の集客要素となっている。1 日あたり平日 50 人から 100 人、土日 300 人程度の利用がある。「こどもはっち」では一定の集客効果が表れているが、周辺の商業施設等へどう回遊させるかが課題である。
- ・ NPO 法人はちのへ未来ネットが保育士 2 名と子育て経験者の計 8 名のスタッフで運営している。
- ・ 親同伴で子供を遊ばせる場の提供と、子育ての相談に応じている。（託児やファミサポはしていない。）産前から産後、赤ちゃんから未就学児の母子に向けた事業展開をしており、ゴールデンウィークには親子で参加する運動会など予約制の自主事業も行っている。ランチタイムは時間限定で飲食を可としている。

岩手県滝沢市

○ビッグルーフ滝沢の運営について

- 1 日 時 平成 30 年 4 月 23 日（月） 15 時～16 時
- 2 場 所 滝沢市交流拠点複合施設「ビッグルーフ滝沢」
- 3 説明者 市民環境部地域づくり推進課 課長 高橋克周 氏
黒澤 高 氏

4 概 要

(1) 施設の機能

芸術文化（大小ホールと防音が施された音楽スタジオ、ダンススタジオ、陶芸もできる創作室等）、生涯学習（クッキングスタジオ、図書館等）、産直、市民活動支援、子育て支援（キッズルーム）の場としての機能を備えた複合施設である。さらに駐車場に防災広場としての機能を持たせ、災害発生時には、災害用仮設テントや災害用マンホールトイレが利用できるなど、市役所に隣接した立地を活かして、災害時の避難拠点・防災拠点としての機能も備えている。

(2) 施設の特徴

施設自体が使いやすさを重視した設計になっているだけでなく、ソフト面でも自由に使い勝手のいい空間を提供しているのが大きな特徴である。各部屋はガラス張りで開放感のあるオープンな空間となっていて、図書館を除き全館飲食・飲酒可にしており、屋上のテラスや施設前の広場等でビアガーデンやナイトプールのイベントを開催したり、キッチンスタジオ（調理室）で料理を作りながら飲食・飲酒できるなど、公共施設ならではの規制をなるべく取り払うような運営方針としている。キッチンスタジオ等の電化製品の設備には高い投資はせず、玄関前のホールに多様な使い方ができるテーブルと椅子のセットのパーツ作成を地元の家具会社に依頼し、市民と協働で組み立てている。

(3) 指定管理者

全国的に施設の指定管理を行っているファンスペース株式会社（東北初進出）と地元の劇団ゆうが組んだ「アルビレオたきざわ共同事業体」。

(4) コンセプト

市民とワークショップを重ねて作り上げている。具体的な運営計画については行政側（滝沢市地域づくり推進課）が作成を行っている。

(5) 図書館

直営で教育委員会文化振興課の所管である。立地が盛岡の青山地区から近いことや、新しい施設で蔵書も増えたこともあり、以前の図書館よりも利用者はかなり増えている。(教育委員会直営で、飲食禁止や静かにしなければならないマナー等は従来通りのまま。課題解決支援等のトレンドも取り入れることができていない。)

(6) たきサポ／市民活動支援センター

打合せ用のオープンスペースを60団体うち1日5～6組が1日に利用している。印刷室もあり、自治会等が1枚1円で印刷機を利用している。個室になっている相談室もあり、小規模に行う面接等にも使われている。(いずれはNPOを育てる方針とのこと。)

(7) キッズルーム

ガラス張りになっており、無料で自由に使える。保育士の資格を持つスタッフが指導にあたっている。ベビーカー置き場がないため、休日にはルーム前がベビーカーだらけになり、せっかくのガラス張りの部屋の効果が十分に発揮されていない。(部屋の外から中で遊んでいる子供を見守ることができないなど。)

(8) ホール

大ホール～ホワイエ～小ホールは仕切りを外すと一体化して使える構造である。ホールの収容人数はあえて大規模とせず、大規模な収容は隣接する盛岡市の施設を利用するという考え方で、競合せず使い勝手を重視している。

(9) その他

空いているスペースで指定管理者のアルビレオがアフタースクール(学童)を運営している。午後には、学習スペース兼通路で子どもが多数学習して賑わっている。

5 調査結果に対する意見(委員の所感)

5月22日に所管事務調査を開催し、2市の先進地事例調査結果と紫波町の事例について振り返り、次とおり意見を取りまとめた。

①事前の市民とワークショップによるコンセプトの設定

→どちらの施設にもしっかりとしたコンセプトがある。コンセプトが決まれば、それに沿ってどういう施設運営にしなければならないかが決まる。設定課題「多世代による日常的な賑わいを創出する」ための施設にする。これも一つのコンセプトになるのではないか。

②貸館も自主事業も使い勝手を良くするために、施設全体を自由に多様に利用できる運営体制の構築

→直営・指定管理だけでなく、所管の変更は必要か。

八戸市はまちづくり文化スポーツ観光部が所管する。滝沢市の複合施設は地域づくり推進課（指定管理）で、図書館のみ教育委員会直営している。他自治体の例では、紫波町図書館（オガール）は企画課情報交流館事務局となっている。

③ 日常利用で重要な集客要素

→ こどもはっち（八戸）もキッズルーム（滝沢）も、集客に大きな効果を表している。設定課題「多世代による日常的な賑わい」でいう多世代とは、親と子、または祖父母と孫といった子連れ者に設定し、利用を図るべきではないか。

④ 多世代による日常的な賑わいを創るため、ワークショップの展開、市民活動の居場所、利用がないときの空間活用などの工夫により稼働率の高い会議室や賑わいを創れる施設づくり

→ 地域交流センターの貸会議室と土風館多目的ホールの差別化

来訪者の確保にあたり使い方の提案をするのは行政か指定管理者か。

→ 市民活動の支援の場としての使い方

ビックルーフでは、テーブル、印刷室、ロッカー等の設備の貸出を行っている。

→ 空間の有効活用検討の必要性

毎日稼働させることが必要であり、「子連れ」をターゲットに設定した場合、会議室の利用がないときは子供の遊び場にする等の検討が必要。